

跡——1975年度の分布調査から——』と題する報告(文献1)がなされており、一定程度の成果をおさめているが、本資料については諸般の事情からそれに掲載することができず、今日に至ってしまったものである。したがって、ここに追加資料として紹介し、その責を果すこととする。

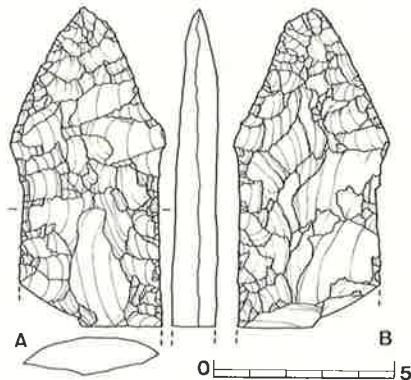
遺跡は、瓜幕市街より東南へ約3km、瓜幕川右岸の標高280m前後にあり、南方向に突出した舌状の高台に立地している。

II

図示した資料は、黒曜石を素材とした現長8.8cm、最大幅4.3cm、厚さ1.2cmを計る両面加工の尖頭器の破損品であると思われる。調整剝離は現存部分においてA面、B面ともに120回以上の剥離を加えており、とくにA・B面の両側縁部の細部調整にはその約62.8%の細かい剥離が入念に加えられている。全体的に薄身に作り出されている。

III

さて、本資料は如上の特徴から察するに、従前より言及している所謂「両頭石槍」と類似したものであることがうかがわれる。この種の資料についてはすでに藤村久和・田中実両氏(文献2)や西幸隆氏(文献3)等によってその分布が明らかにされており、本資料もその一つに追加されうるが、伴出遺物が不明なこともあって所属の時期はさだかでない。十勝地域では、本資料のほかに陸別町石井沢(文献4)から1点両頭石槍と思われるものが採集されている。また、両頭石槍と同一形態を呈するものは、北海道以外においては福島県に散見(文献5)される程度でさほど顯著な出土例は見られないようである。福島県の例はいずれもが縄文期の所産であるらしい。山内清男氏は、北海道及び福島県の資料を取り上げ論考され



第2図 両頭石槍実測図

ているなかで、両頭の尖頭器という形態上その用途をある種の格闘具と想定され、したがってそれは「両尖匕首」という名称を冠せられているのは興味深いことである。

以上、簡単ではあるが二、三気付いた点を付与し新資料の報告を終りたい。

(函館空港遺跡調査員)

文 献

1. 十勝川流域史研究会・鹿追町考古学研究会編 1976 「鹿追町の遺跡——1975年度の分布調査から——」『鹿追町考古学研究会報告』I
2. 藤村久和・田中実 1968 「両頭石槍の新資料」『AINU MOSHI RI』III
3. 西幸隆 1970 「釧路村達古武湖畔出土の両頭石槍」『釧路市立郷土博物館々報』206
4. 明石博志 1973 『陸別遺跡』
5. 福島県編 1964 『福島県史第6卷考古資料』
6. 山内清男 1972 「両尖匕首」『山内清男・先史考古学論文集』新第5集

享保七丁丑年銘のある鰐口

後藤秀彦

I

ここに紹介する機会を得た鰐口は、1954年当時

浦幌町字静内で農業を営んでいた出村幸治氏が、浦幌町字昆布刈石の土取場で偶然発見し、1961年

になって浦幌町教育委員会へ寄贈したものである。その後、同鰐口は1968年に開館した浦幌町郷土博物館へ移管され、現在は同館に所蔵されて陳列されている。

発見当時この金属製の鋳物がどういう用途をもったものなのか不明であったらしいが、地元の静内小学校長らに見せ「享保七年」の銘があること、「松前泊川」という地名が彫られていることが判明して以来、出村氏は松前町役場にもその旨を問い合わせその用途を探ぐろうと苦心したが遂にその用途等は不明のまま現在に至ってしまったものである。

II

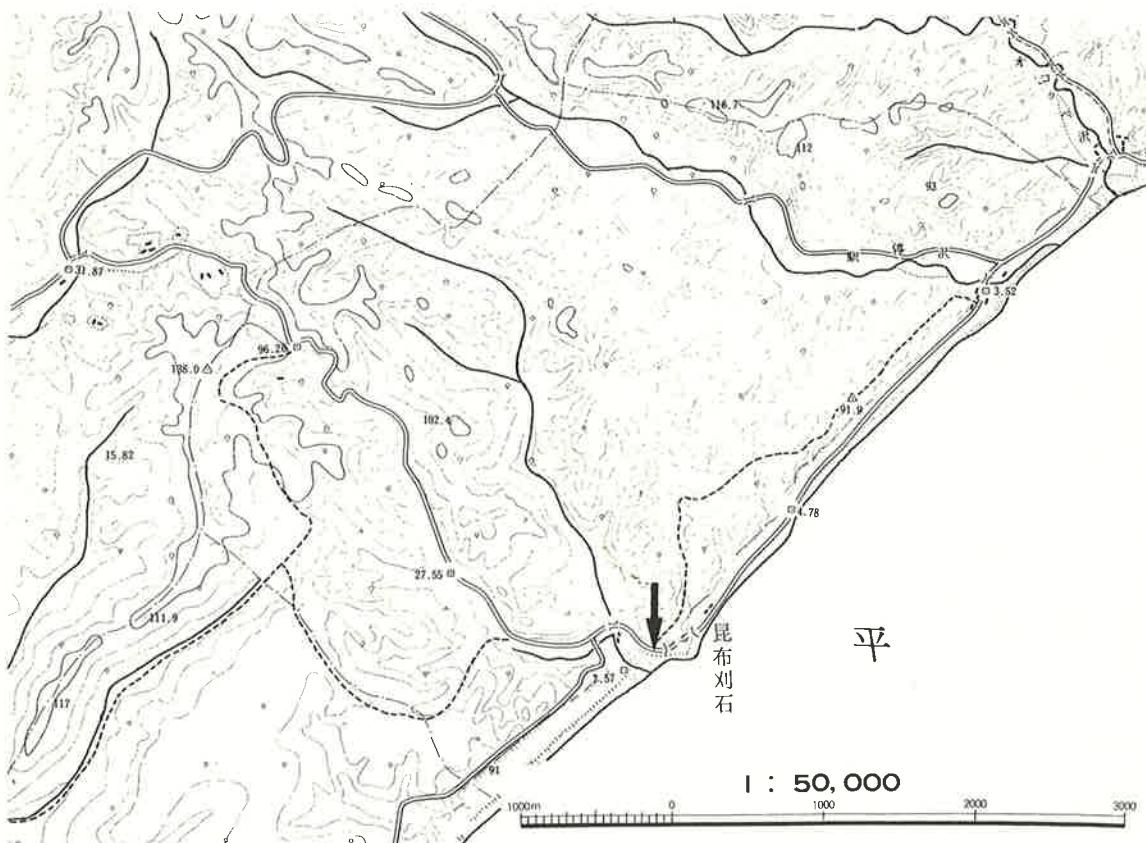
この鰐口が発見されたのは、太平洋に面した海岸線で昆布刈石と呼ばれたのはところである。(Map 1) 文久年間に著わされた松浦武四郎の『蝦夷日誌』によればこの地を次のように記している。

「川口〔十勝川〕より昔は汐干の時、(十五丁

廿五間) クマネ平(大崩平)の下を通り行し也。今は新に道を此峠の後ろに切て、(八丁四十間) ホンイショコペ(小滝)まで行下る。此道また下り難き時はヲコッペ迄行に宜し。(六丁) シヨコペ(小滝)本名シヤウケイベにて、名義、滝の水が飛と云儀也。此辺沙地也。(十三丁五十間) コンブカルウシ〔昆布刈石〕岩崩平磯名義、昆布取に多しとの儀。此岬風雨にて通り難き時は上に新道有で、其を廻る也。」(松浦、1962)

ここでいう「上に新道有て…」とは1805(文化2)年近藤重蔵らが幕命を受けて開削したものであるが勿論、この小文で述べる享保年間にはこうした道路もなく砂浜を歩き、磯を歩くのが唯一の通行路であったことは推測に難くない。

また、この鰐口発見の地のすぐ近くには「カムイ岩」と呼ばれる岩が磯より立起しており、「昔漂流せし船此の岩を見認めて陸地に至り救れたる。アイヌ、イナウを祀リビラ通過毎に拝礼して去る。」という伝承も残っている。(齊藤、1935)



Map 1 鰐口出土地点及び付近地形図 (Mark →)

III

鰐口は、神社・仏閣の軒先に懸けてその前面に鉢と称する布綱を下げ、参詣人はこの緒を振って打ち鳴し礼拝する仏具の一種である。古くは「金口」「金鼓」などとも呼ばれたが室町時代以降は専ら「鰐口」の名称を用いるようになってきた。

(久保、1967)

北海道内におけるこうした仏教あるいは神道考古学関係の論考は極めて乏しいが、1932年久保常晴によって「北海道北見網走発見の板碑に就いての私見」が報告され「久保、1932」、この応永銘のある板碑について最近になって白山友正は東北型との見解を示し(白山、1973)、更に久保は関東型であると反論し(久保、1973)、その他の仏教遺跡・遺物については坂順一、大場利夫、水田富智らが上の国町夷王山墳墓群について報告し(坂、1954・大場、1969・水田、1968)更に加藤邦雄がこの墳墓群について14世紀末から15世紀初頭の和人の火葬墓との見解を示されているのがその主なものである。

(加藤、1975)

さて、鰐口についての報告には管見の範囲では白糠町厳島神社所蔵の青銅製径6寸の「明和四丁亥天五月吉辰 松前シラヌカ觀音堂 願主伞 千両寄進」銘のものがある。(渡辺、1954)また、札文町厳島神社の青銅製鰐口には、「(表面) 奉納天明二壬寅六月吉日 宗谷場所 (裏面) 奥州南



PL. 1 鰐 口

部大畠 武川氏敬白 支ハイ人 向井金藏」と銘のあることが紹介されている。(高津、1969)

IV

さて、ここで紹介する鰐口は直径12.2cmの青銅製小型のもので、鰐口の中でも最小の部類に入るるものである。

〔耳〕断面凸レンズ状を呈し、耳幅は3.6cmを計測する。耳厚は0.3cmで図左側の耳は目とともに欠損している。

〔目〕鰐口の正面から見れば付け根のところから斜め下に突出している。目の位置は、撞座の中心線を二等分する水平線上にその中央があり、ほぼ中央部にあると言える。側面から見ると目は穹窿状に近い。

〔肩〕接合部は、部分によって接合に喰い違いが認められ接合の際にヤスリ状のもので磨ったものと思われる。

〔唇〕その先端は薄く脣部との分化は極めて薄い。

〔口〕唇の幅は、鰐口の半面を欠いているので詳らかではないが、1.2cm位と推定される。

〔銘帯〕幅1.3cmを計測し次のような銘が陰刻されている。

(右廻り) 享保七丁丑年

(左廻り) 奉卦 松前泊川加藤
六右門

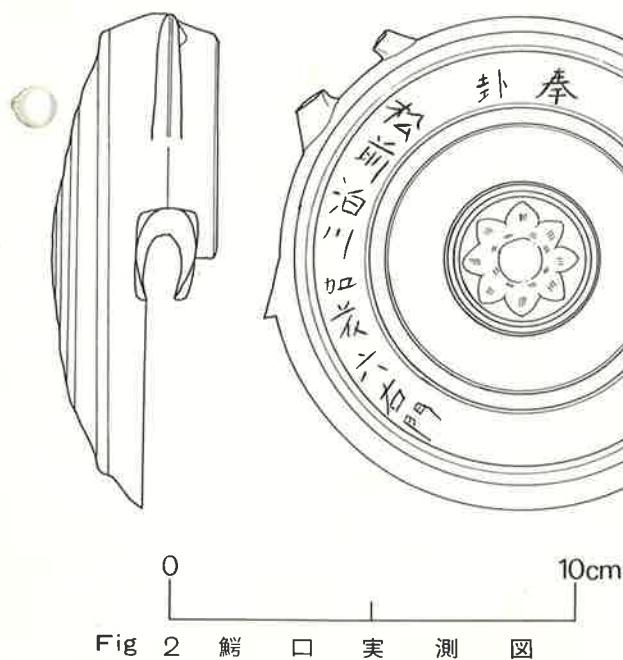


Fig. 2 鰐 口 実 測 図

〔中区〕幅 1.9cmを計測する。

〔撞座・撞座区〕直径 3.1cmを計測し、その中央部に8葉の蓮華文が陽鋲してあるが、磨耗が著しい。撞座の大きさは直径の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{3}$ をもって普通とするが、本例は $\frac{1}{4}$ 程度で一般的な大きさと言えよう。

〔型持〕本資料に型持はない。

〔材質〕青銅製で、全体に濃緑色を呈している。

V

IVにおいて鰐口の具備する諸特徴を記したが更にこの鰐口の在銘その他について順次論及してみよう。

一般に在銘の多くは年紀、寄進の神社仏堂名並びにその地名、施入者名、鑄物師名を陰刻するのが普通である。この鰐口に限って言えば寄進の神社仏堂名及び鑄物師名を欠いている。これらについては、欠損している裏面に陰刻されていたのかもしれないが、とにかく不明である。さて、紀年法その他の用句を形式上より吟味を加えてみよう。

「奉卦」は「奉掛」と同意であるが、この用法は「奉懸」とともに鎌倉時代・南北町時代に特に東日本に見受けられ、室町時代以降全国に広まった用句と言われている。(久保、1967) 従って、紀年銘である享保七年とは矛盾しない。次に紀年銘である。この用句で通常問題視されるのは干支の位置であるが、本例の場合干支は年号と年の間の位置している。このような用法は戦国時代以降間々用いられたものという。(久保、1967) この点の用句については全く問題はないが、享保七年(1722)は丁丑の年ではなく「壬寅」の年であり年号と干支との間に大きな矛盾が認められるのである。因に、享保七年に最も近い「丁丑」年は、元禄10(1697)年と宝曆7(1757)年であるが前者には25年、後者には35年の隔りがあり、この点で偽作の疑いも出てくるのであるが造作の点で疑義をはさむ余地はほとんどなく問題の残るところである。

また、願主である松前泊川加藤六右門についての資料は全く手元になく不明と言わざるをえないが、享保7年以降に書かれた「御本国日記」「御扶持家列席帳」・「御役人諸向勤姓名帳」(松前町史編集室、1974.)にはその氏名は出てこないようである。

さて、最後に疑問となるのは寄進の対象となつた神社仏閣である。昆布刈石付近は浦幌町内にあっても昆布の豊富な採集地として知られ、比較的初期から和人の出入りのあったところである。それは寛政～文政期において既に昆布刈石のすぐ東のオコッペに官製の「休所」があった(河野、1925)ことからも知られるが、この場所に神社仏閣の存在した記録はなく、またこの鰐口が地下1mの土中に埋蔵されていたか不明である。不明の点ばかりであるが類例を待ち再検討してみたい。

(浦幌町教育委員会)

引　用　文　獻

- 大場利夫(1969)北海道桧山郡上の國夷王山遺跡
日本考古学年報17
加藤邦雄(1975)日本各地の墳墓——北海道——
新版仏教考古学講座7 墳墓
久保常晴(1932)北海道北見国網走発見の板碑に就いての私見、銅鐸創刊号
——(1967)鰐口の研究、佛教考古学研究
——(1973)北海道応永板碑は関東型である
考古学ジャーナル89
河野常吉(1925)北海道道路誌
斎藤米太郎(1935)郷土先史民族砦趾
坂順一(1954)渡島国桧山郡上の國村墳墓群についての一考察、ミクロリス8
白山友正(1973)北海道応永板碑考、考古学ジャーナル86
高津信行(1967)礼文町史
永田富智(1968)上の國への和人定着年代について——古墳群の発掘調査と出土した古錢を中心として——、新しい道史6—2
松浦武四郎(1962)蝦夷日誌(上)
松前町史編集室(1974)松前町史 史料編1
渡辺茂(1954)白糠町史

1977年3月31日	印 刷
1977年3月31日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
發行責任者 家 村 克 行	
發 行 所 浦幌町郷土博物館	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社	
北海道帯広市西7条南6丁目	